二　余呂米の「六」と川上神社の石灯籠

万延元年（一八六〇）というから今から一一五年前の話である。

余呂米に「六（ろく）」という十七歳になる若者がいた。田植えを終わったある日、六は村の仲間二、三人と連れ立って、野口の奥の高滝（兎尻東又沢の枝沢）へ蕗とりに出かけた。本沢から約一〇〇㍍入ったこのあたりは、両岸が切りたった断崖絶壁をなし、ふだんは人の寄りつかないところである。ここに、高さ数十㍍の〝高滝〟という美しくけだかい滝があり、滝の上は広い窪地で、蕗が密生している絶好の場所であった。

滝を登りつめ、ここへたどり着いたのは午前十時ごろ。若者たちは今日一番の収穫は俺が……とばかりに、四方へ散って蕗を切り始めた。

六は腹がへって来たので、「ユダシ」から「ワッパ飯」を出してひと足はやい昼食をしたため、火打石で煙草に火をつけていっぷくつけていた。そのうち、用便をもよおしてきたので滝の真上にきて用をたした。するとどうだろう。一天にわかにかきくもり、物凄い雷鳴のなかから真赤な腹の巨竜が、焔のような舌をふりたてて、六をひと呑みにしようと起ち上がったのである。

肝をつぶすとはこのこと。一瞬、六は凍りついたようにその場に立ちすくんだ。

六の家は、代々「マタギ」の血統を引く家柄である。夢我夢中の彼の口から、父に教わった次の「ウタ」がほとばしるように流れ出、山間にこだました。

念被観音力

蛇や蛇や　千茅の中の　蕨の恩を　忘れたか

唵阿尾羅吽欠娑婆訶

臨兵斗者皆陳烈在前

どのぐらいの時間がたったかわからない。あたりが静かになったので、六はこわごわ目をあけてみた。すると、おそろしい巨竜はかきけすように消え、いれかわりに彼のそばに立っていたのは、白く長いあごひげを垂らし、「カチミンユ」（武士の陣羽織）を着、錫杖を手にした仙人であった。

仙人は、六の顔を慈愛ふかいまなざしで見ていたが、やがて着物の袖でハラリと六の頭を覆った。それっきり彼は夢をみているような気持になった。ただ、はっきりしない感覚の中で、なにか柔かいものに包まれて空中をすべっているような気がしていた。……やがて、意識がもどった彼がみたのは、沢の出口の川原に座り、腰に鉈を帯び、コダシを背負った自分自身の姿であった。

一方、話変わって彼の仲間は、山ほど採った蕗を背負い、朝に約束した帰りの二岐道で彼の現れるのを待っていた。しかし、待てど暮らせど六の姿は見えない。手分けをして、あっち、こっちと大声でたずね回っ

たが六の姿はどこにもない。探しさがして彼らが見たのは、川原にふたたび失神して倒れている六の姿だった。

「あの元気な六が、一体どうしたことだ」と、みんなは六の顔に川の水を吹きかけ、頬を叩き、大声でその名を呼んだ。やっと気がついたが腑ぬけのようになって正体がない。みんなは葡萄づるで編んだ応急の「モッコ」をつくり、棒でかついで、やっと家へ連れもどった。

あまりな六のこのようすに、家の中は大騒ぎになり、やっと聞き出したのは、巨竜のこと、仙人のことだった。竜神さまのおとがめを早く晴らしたい。さっそく村中で相談の結果、観音さま（濁川の摺臼野神社）に鳥居を建てて奉納し、竜神さまを騒がしたことにお詫びすると同時に、観音さまにお礼を述べることにした。この鳥居は、翌年（文久元年）立派に完成し、奉納された。現在も、その土台石の一つが残っていて、当時の名残りをいまに留めている。



現存する「奉納された石灯篭」

やがて六は濁川へ養子に入ったが、彼の周囲で竜とか蛇の話は一切禁句とされていた。決まって気分が悪くなり、床につくのが例だったからである。

鳥居が建ってから五十数年が経過した。今は七十歳近くになり、財をなしていた六は、村の人たちと語らい、腐朽した鳥居のかわりに盛岡の石屋へ依頼し、二基の石灯籠を奉納した。大正六年旧四月八日のことである。

二基の石灯籠は、「山へ入っても滝のかしらで用便をするものではない、竜神さまのおとがめがある」と、川上神社と社名の変わった境内でいまも無言で人々をいましめている。